

12 特別活動

特活プロジェクト

1. 研究テーマのとらえ方

(1) はじめに

特別活動の指導にあたって、「豊かな感性を育む」とは、人間、自然、社会、文化などのかかわりを通して、①「美しいもの、価値あるものに気付く感覚をみがくこと」 ②「物や事象から感じたことを表現し、実践化する力を育てること」 ③「実践したことを振り返りより確かな認識をすること」であると捉えている。

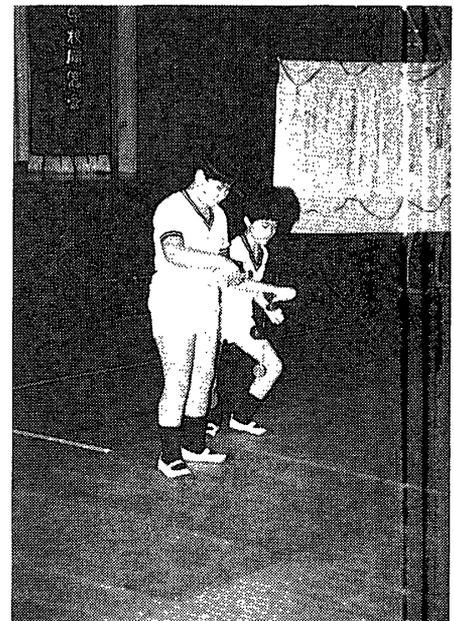
子どもたちは、日々の生活の中で「こんなことをしてみたいな。」「こんな生き方ができたらいいな。」と様々な夢や願いを持っている。そのような子どもたちの夢や願いを実現し豊かな感性を育てていくためには、児童の内発性を重視したさまざまな活動の場を設定する必要がある。そして、子どもたち自身の実践力を育てるため、その目標、方法、活動が可能な限り児童自身によって考えられ、つくられ、実践されていかなければならない。すなわち、自主的であること、実践的であることが、望ましい集団活動を支える基本でなければならない。それは、子ども一人一人の中に豊かな心が組みこまれる過程でもある。

(2) 豊かな感性を育む特別活動

子どものよさや可能性は、人間、自然、社会、文化などのよさとかかわりを通して、また、教師のよさや集団の中で他の子どもとかかわることは、まさしく特別活動が特質としているものである。

子どもたち一人一人の感性を育む要素として特別活動においては、次の二つを上げることができる。

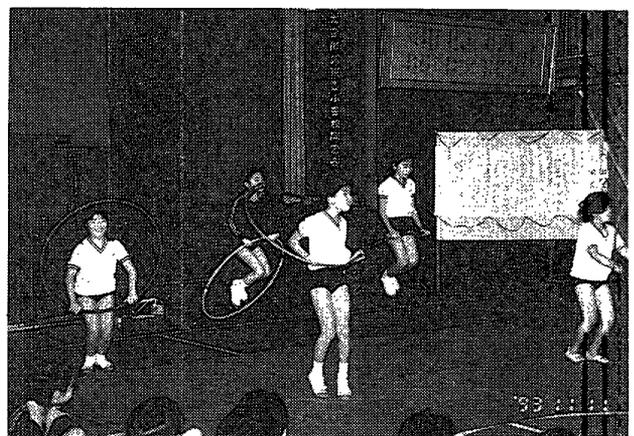
- ① 題材の持つよさと積極的にかかわることを通して、豊かな感性を育む。
- ② さまざまな活動場面の中で、教師のよさや他の子どもよさとかわることを通して、豊かな感性を育む。



(3) 豊かな感性を育むための条件

いくらよい題材であるように思えても子どもたち一人一人が本気で取り組むことができなければ、その活動は無意味である。豊かな感性を育む活動となるためには、いくつかのポイントになるようなことがあるように思われる。

では、特別活動の授業において、「豊かな感性を育む」ための条件とは、どのようなことだろうか。



- ① 子どもの豊かな感受性をゆさぶるような題材であること。
- ② 教師と子ども、そして、子ども同士の人間的なふれあいを基盤とする活動であること。
- ③ 子ども一人一人の自主的、実践的な活動の場が保障されていること。

2. 研究の計画

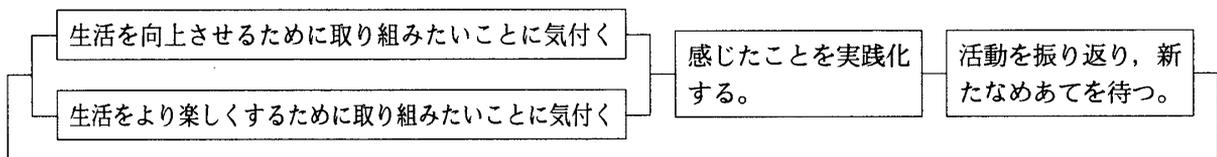
(1) 研究仮説

特別活動の授業において、次のような手立てを持って授業を構成すれば、子どもたちの豊かな感性を育むことができるであろう。

- ① 子どもたちが、今本気で取り組みたいと思っていることを題材として取り上げる。
- ② 子ども一人一人の自由な発想や想像力が生かされるような実践の場を設定する。
- ③ 活動を通して、心の底から感じたことや考えたことなどを表現する振り返りの場を設定する。

(2) 研究仮説において

特別活動において豊かな感性が育まれる過程を私達は次のように考えている。



子ども一人一人は、どの子も心の奥底に「美しいもの、価値あるもの」を追求していきたいという願いを持っている。そのような子どもの願いをキャッチできる教師の感性が、題材選択のときの一つの鍵である。何気ない子どものつぶやき、何気なく書かれた日記の中のワンセンテンス、そういった見過ごせば何でもないようなところに、子どもの内なる叫びは発せられているのである。子ども一人一人が、今まさに求めていることを時を逃さず題材として取り上げていくことが、感性を育む授業づくりの第1歩と言える。

いくら見かけがよくて、価値ある活動のように思えても、それが、真に子どもの内発性に根ざした活動でなければ、子どもの心を揺さぶるものとはならない。例え、活動の中身や表現は拙いものであっても、子ども一人一人の自由な発想や想像力といったものが生かされる活動の場こそ大切である。結果ばかりを求めて、形式的な活動に陥らないよう、教師の配慮が求められるところである。子ども一人一人が、五感をふるに働かせ全力で体当たりしていけるような活動の中で、豊かな感性は育まれていく。

そのような活動について、子どもなりに心の底から感じたことや考えたことなどを振り返り、表現しあう場を持つことは、次のような意義がある。

- ① 活動の価値を確認する。
- ② 自分自身や友達のよさを見つめ共感しあう。
- ③ 次への活動意欲を高め、新たなめあてを持つ。